

■特集・女性作家の系譜<英>

マリ・ド・フランスの狼男伝説 ——「ビスクラヴレット」をめぐる——

末松良道

12世紀イギリスにおいて、アンジュー・プランタジネット王家の周辺で活動したとみられているアングロ・ノルマンの女性詩人、マリ・ド・フランス(Marie de France)は、西ヨーロッパ、特にケルト世界のフォークロアからの題材をしばしば取り上げ、それらに独特の味つけをして極めて繊細な文学世界を作り上げている。中でも、彼女の韻文物語集『レー』(Lais)の一編、「ビスクラヴレット」("Bisclavret")は、狼男伝説に題材をとった興味深い作品である。本論では、西ヨーロッパの文化における狼、および、狼男の伝説を検証しつつ、それをマリ・ド・フランスがどのように独自の文学世界に昇華させたかを跡づけたい。

1

狼自体は洋の東西や古今を問わず、人間には極めて身近に存在した野獣であり、特に今よりもはるかに森林や原野が日常生活の一部であった古代、中世においては、熊と並んで、人間の近くにいるふたつの主な猛獣のひとつであった。それ故、狼は古代、中世の神話、伝説、宗教説話、そして文学作品などにはおなじみの存在である。そういった身近な動物との関わりの中で、狼が人間に変身する、あるいは人間が狼になるといった「狼男」(あるいは、「狼女」)伝説も、かなり広く生まれたようだ。池上俊一氏によると、狼男伝説は、広くは「インド=ヨーロッパ語族共通の遺産に属する」¹⁾。古典古代の神話に

おいては、狼に育てられ、成人してローマを建国したとされるロームルス、レムスの話がある。ギリシャ神話では、アルカディアの王、リュカオーンに関する物語がある。この王と彼の息子たちは誰よりも高慢であったのでゼウスの怒りをかって狼に変えられたとある²⁾。また、西ヨーロッパにおいても、ギリシャ・ローマの伝統とは別に、ケルト民族やゲルマン民族固有の狼男伝説の伝統があったものと思われる。マリ・ド・フランスもそのようなケルトの伝統から発想を得ているのであろう。

狼男は、古代中世よりも近現代になってからのほうが邪悪にして凶暴なイメージを付与されているように見える。洋の東西を問わず、今世紀に生きる者にとっては狼男はハリウッド映画や大衆小説によって凶悪残忍なものであるというイメージを植えつけられているのではなからうか。一方、狼という実在する動物は、凶暴な害獣というよりは保護されるべき希少動物で、美しい野性動物といったところだろう。事実、アメリカ合衆国の一部では、他の土地から狼を移植して野性の原野で繁殖させる試みもあると報じられている。しかし、もちろん自然と密接な関係を持ち、しばしばそれと戦いつつ暮らさねばならなかった中世の人々にとっては、動物としての狼は彼らの日常生活に頻繁に侵入し、家畜を食い殺し、場合によっては人に直接危害を加えかねない恐ろしい猛獣となりえた。ヨーク公エドワードの文章は中世の人々が人を貪り食らう狼にいかにか大きな恐怖を抱いていたかを

示している。

狼は戦争の起こっている国では、人の死肉をむさぼる。そして、人の肉は大変美味であるために、彼らが一旦その味を覚えたら、たとえ、餓死しようともそれ以外の動物の肉を食べようとはしなくなる。多くの人々が、狼が羊飼いを食べるのを目撃している³⁾。

15世紀前半に書かれた『パリの一市民の日記』の作者は繰り返し狼について触れている。たとえば1439年12月の記述によると、「オオカミどもが4人の女を食い殺した。次の金曜日にはパリの近郊で17人の女を襲った。彼らのうちの10人はその時受けた傷がもとで死んだ。」⁴⁾

さらに、狼は、飢餓や疫病の大流行、戦争など、人間の死骸が多く放置されたり、生きている者も体力がひどく弱っているような時期に猛威をふるった⁵⁾。クロード＝カトリーヌ・ラガッシュとジル・ラガッシュによると、「百年戦争の間とその後には、フランスでは狼が増えた。1476年の1年間にパリの周辺で80人以上の人々が狼に食われた」⁶⁾。これらはあくまで狼についての言及であって、狼男についてはない。しかし、狼にたいする恐怖は狼男の恐怖をも高めずにはいられないだろう。マリ・ド・フランスも「ビスクラヴェット」の冒頭で次のように狼男の凶暴さを述べている。

かつては耳にすることがあったし、また、しばしば起こりもしたことだが、多くの人達が狼男に姿を変じ、森の中を棲み家としたものだ。狼男、というのは野獣であって、この狂気に取りつかれているかぎり、人間をむさぼり喰らい、大層な害をなし、森の奥深くを徘徊して暮らすという。(11.5-12)⁷⁾

では、狼はキリスト教徒の関連ではどう見ら

れていたであろうか。元来、キリストが羊飼い、信徒が羊の群れであるとすれば、古代・中世の伝統的な農村ではおなじみの羊の敵であった狼は、キリストとその群れを襲う敵の例えにうってつけであろう。池上俊一氏が指摘しているように、狼と悪魔を結びつけるような伝統は既に聖書のなかに見られる⁸⁾。

わたし[イエス]はよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いはなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると羊を捨てて逃げる。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。(ヨハネによる福音書、10.11-12)

これに続いて同様の結び付きは初期キリスト教の教父や中世キリスト教の文献にも散見される。やはり、池上俊一氏の著書より、13世紀初期のピエール・ド・ボーヴェーの教化文学作品『動物誌』より引用する。

オオカミは悪魔を表す。というのは、悪魔はつねに人間にたいする憎悪を抱いているから。そして信徒の魂を欺くためにかれらの想念のまわりをうろつく。[.....]雌オオカミは子オオカミを育てるときに、巣穴の近くでしか獲物をつかまえないが、それは、悪魔が善行から遠く離れた者たちを世俗的な富で養うことを意味する。[.....]オオカミは、全身で向きをかえないかぎり、首だけ後ろを振り向くことができないという事実は、悪魔が、いかなる善にも振り返ることができないことを意味している⁹⁾。

2

以上の様に、狼と狼男を恐怖すべき存在とし

て見る伝説を踏まえて、マリ・ド・フランスはこれをどのように自分の物語に取り込んでいるであろうか。既に引用したように、作者は物語の冒頭において、狼男を大変恐るべき怪物として位置づけているが、その部分で特に注目すべきは狼男は元来そのように生まれついでいて、人間とは別個に存在しているのではないということだ。彼らはある時、狼男になったのであり(Humes plusurs garual devindrent)、そうなった後は狂気に取りつかれ(en cele rage)、深い森に棲むのである(Es granz forez converse)。

言い換えると、狼男は人間の住む文明世界と、それが持っている様々の属性から逸脱し、野性、自然、狂気などに身を任せたとと言えるだろう。中世ヨーロッパの深き森はその様な半獣半人にとって格好の棲み家である。それはランスロットが狂気に身を任せるときに住まうところであり、怪物の緑の騎士が住むところ、文明や人間の理性を越えた力の存在する空間である。ビスクラヴレットが人の世界に戻るきっかけとなったのは、彼の主人たる王が森に狩猟にきたからである。ここにおいて、狩猟という行為は、野性(森)のなかに人間が分け入って、そこに呪縛されている者を救い出すという象徴的な行為としてとらえられるだろう。

主人公のビスクラヴレットはこのような森、そしてそこにおいて狼となる自分と、宮廷で王の忠臣であり、家庭では妻を愛する夫を演ずるというふたつの分身に引き裂かれている。つまり、この物語は、文明(あるいは、人間社会)と野性(あるいは、自然)とのふたつの極を生活のあり方だけでなく、肉体にも内包してしまった主人公の葛藤を描いた作品だと言える。

物語の冒頭で、マリは彼の人間社会における位置を強調する。彼は高貴で名声にも恵まれた騎士であり、特に彼の主人と親密で(De sun seinur esteit privez [1.193])、隣人達にも愛されている(1.20)。また、マリは彼が妻を愛し

ていることも言い忘れてはいない(1.23)。彼は宮廷と家庭においてしっかりとした社会的基盤を持った騎士なのである。

一方で、彼は狼男としてのまったく別の姿を持っており、それは物語の冒頭でマリが述べた恐ろしい狼男の姿とほぼ一致するものであることを、我々は彼自身の妻への告白から知る。

「妻よ、私は狼男になるのだ。あの大きな森の中に出かけると、木々が鬱蒼とおい茂るあたりで、獲物をあさり、略奪をして暮らしているのだ」(ll.63-66)

読者は、ここまで読んだ時点では、当然ながら、怪物と寝食を共にしていると突如知らされた妻に同情せざるを得ないだろう。しかも、彼は狼狂に取りつかれていることで特に苦悩している様子もなく、また、なんとかこの病を克服しようと努力するふうでもない。彼は自分の二重生活の真相を、愛する妻から何とか隠し通そうとし、妻の質問になかなか答えない。彼にとって狼男になることは欲びであり、日常生活からの解放なのだろう。まるで麻薬に耽ける現代人のようにも聞こえる。彼は狼から人間に戻って帰宅した時、「喜ばしく、楽しげな様子」をしているのである(Une feiz esteit repeirez / A sa meisum joius e liez [ll.29-30])。

文明と野性、日常の社会生活と非日常の森の生活のふたつを享受しているビスクラヴレットは、この時、自分のおぞましい二重生活に対し、自ら特に疑問を感じているようには見えない。物語の結末においては、この夫婦に起こった不幸の責任は、ほとんどすべて妻にあるかのような印象を受けるが、そもそも主人公にもかなりの原因があったといえるだろう。

文明と野性のふたつの極を置いてこの物語を見る時、興味深い道具としてマリが使っているのが、ビスクラヴレットの衣服である。彼は狼になる前に衣服を脱ぎ、それを森のそばの古い礼拝堂に置いておく(11.88-96)。これが単なる場所や小屋ではなく、礼拝堂であるのは、ビスクラヴレットをキリスト教の力がかろうじて文明世界につなぎ留めているということだろうか。あるいは、森のそばの礼拝堂は、野性の世界を照らす文明の灯台の様な役割を持っているとも言えるだろう。

当然のことながら、ハリウッド映画等のイメージを植えつけられた現代人が気をつけなければいけないのは、ビスクラヴレットが狼に変身するときには、中途半端な怪物になるのではなく、本物の完全な狼になるということである。つまり、狼とも人間ともつかない、フォーンの様なか中間的な外見の怪物にはならないということだ。彼の主人やその家来達が森に狼に来てビスクラヴレットに出会った時、人々ははじめ、この狼が単なる狼ではないということに気づかなかった。であるならば、完全に狼になりきってしまうビスクラヴレットにとって、衣服は必要ないどころか、身につけることが不可能な物だろう。一方、再び人間に戻る時には裸体というわけにはいかないから必ず必要である。しかし、マリは衣服にそれ以上の重要性も付与している。ビスクラヴレットによると衣服なしで元の人間の体に戻ることは不可能なのである。

「もし私 [ビスクラヴレット] が着物を失い、その姿を人に見咎められてしまったら、私はいつまでも狼男のままにとどまり、着物が返されるまでのあいだ、寄るべのない身の上になってしまう。」(11.73-77)

なぜこういうことになるのか、読者は知らされていない。しかし、いずれにせよ、衣服は単に体をおおうだけでなく、文明社会(人間世界)の扉を開閉するに欠くことの出来ない鍵として設定されている。

衣服の重要性は物語の結末部分で再度強調される(11.275ff.)。ビスクラヴレットは衣服を目の前に置かれても見向きもしない。ある賢明な王の家臣が、ビスクラヴレットは他人の面前では人間に戻ろうとしないだろうから、彼を服と共に一人にしてやるべきだと言い、王がその助言を受け入れたとき、彼はやっと人間に戻れるのである。既に述べたように、ビスクラヴレットにとっては完全な人間か、完全な狼かのいずれかの状態しかあり得ず、中途半端な姿をした怪物としては存在し得ないのである。しかし、彼が人間に戻るプロセスがかなり速やかであるか、ある程度時間のかかるものなのか、いずれにせよある一時には彼は狼とも人間ともつかぬ、まさに「怪物」と言える様な状態にあるに違いない。そして、それこそ彼が最も恥じ、他人に見せたがらない姿のようである。彼にとっては、文明の象徴である衣服を着た人間であるか、狼の姿という別の「衣服」ないしは仮面をつけた野獣かどちらかであれば安心できたのである。

フィリップ・メナールも述べているように、マリのどのレーもその登場人物や題材の如何にかかわらず、主要なテーマは「愛」の問題である¹⁰⁾。「ビスクラヴレット」は、人間性と野性という問題が大きく取り上げられ、レーのなかでは、愛の問題はやや軽い扱いかもしれない。しかし、良く見てみると、ここには、ビスクラヴレット夫婦と妻の愛人にかかわる男女間の愛に加えて、王とビスクラヴレットの間の主従の愛も描かれており、しかも、これらふたつの愛

のあり方が、意図的に対照されているように見え、この作品においても、マリの愛の問題への関心の深さがうかがえる。

ビスクラヴレットは森の中に消えうせる前には、王に親しく仕えていたことは既に述べた。また、結末近くで彼を救った賢い王の家臣も、この騎士が王にとって大事な家来であったと言っている(… al chevalier / Que taunt par suliez avoir chier)。そして、王はこの賢い家臣の忠告を聞いて事の真相を知ろうとビスクラヴレットの妻を尋問することになる。一方、ビスクラヴレットは、たとえ狼に姿を変えても彼の王への愛は忘れてはいない。彼は森で王の一人団に出会った時、「王の姿を認め、駆け寄って慈悲を求めた」(I.146)。王は、それに応えてビスクラヴレットの正体を知らぬまま、この狼を保護し大事に扱うよう家来達に指示する。かつての主従関係にも優ると思われる程、この狼と王の愛は深まる。

毎日毎日、騎士達にまじり、狼男は王のかたわらに寝そべった。誰も彼も彼をやさしく扱った。それほど狼男は気高くおだやかで、何によらず悪さははたらくことがなかった。王が赴くところとあらば、どこへでも従って離れようとせず、常に王のそば近くにあった。彼が王を慕っているのは明らかであった。(II.176-184)

この二人の愛については、更に、ビスクラヴレットが人間に戻った後に王が示した厚遇も忘れてはならないだろう。

[寝台の上に寝ているビスクラヴレットに]王は駆け寄って抱擁し、何度も頬ずりしては接吻した。そして、でき得るかぎりすみやかに、元の領地をすべて返還し、言葉につくしがたいほどの財貨を与えた。(II.300

-304)

ここには、ビスクラヴレットの愛が王の愛を引き出し、その王の愛が狼の姿形に幽閉された家来を救い出すという相互の愛の美しき働きが描かれている。特に、結末の変身は、素直な愛が主人公を解放しあるべき姿に戻すという伝統的なおとぎ話のタイプでもある。

この様な王とビスクラヴレットの愛に比べ、彼と妻の間には愛と呼ぶことができるような相互の交流は存在しない。そもそもビスクラヴレットの秘密を始めて妻が知った時、彼女は夫の狼狂を癒そうとか、夫を理解しようといった気配をまったく示さず、夫がどこに服を隠しておくのかという点ばかり、執ように問いただす。そして、ビスクラヴレットが遂に彼女に譲歩して秘密をすべて打ち明けるや否や、たちまち愛人をつくり、その男を利用して夫の大事な衣服を礼拝堂から取り除いてしまい、彼が元の体に戻れないようにする。彼女はもちろんこの愛人を元々深く愛していたわけではなく、彼の愛情を利用して夫を処分したに過ぎない。従って、結末部分でも、主としてマリの非難を受ける結果となるのは愛人ではなく、妻のほうである。王が、真相を聞き出すために拷問にかけるのは妻だけである(II.262-64)。更に、彼女は、復讐に猛り狂った狼の姿のビスクラヴレットに鼻を噛み切られる。そして彼女の子孫のうち、鼻を欠いて生まれるのは女達のみであった(II.312-13)。

もっとも、妻にも同情すべき点が多いのは言うまでもない。真相を聞いた彼女が、「夫の行状に震えおののき、どうしたら縁が切れるものか、さまざまに思いめぐらし、もはや夫のかたわらに寝ようとはしなかった」(II.99-102)のも無理からぬことだ。マリがあえて使った「夫のかたわらに寝ようとはしなかった」という表現に、生々しい肉体的恐怖と嫌悪感が込められ

ている。言ってみれば、彼女はそれまで狼と交わってきたのであるから。

それにもかかわらず、マリの最終的な判断は妻の責任の糾弾である。既に述べた様に、彼女はビスクラヴレットに鼻を噛み切られたあげく、彼女と愛人の間から生まれてくる子孫は、鼻の欠けた姿をして生まれてくる。これは怪物から逃れようとした彼女自身が皮肉にも怪物と化し、しかも、それが子孫にまで伝わるということだ¹⁾。彼女が夫にした仕打ちは、人間らしいものではなく、獣にふさわしいものであった。であるならば、マリは彼女の外見をも怪物に変えてしまったのである。しかも、狼男との二重生活を安心して享受していた頃のビスクラヴレットでさえも最も恐れていた「獣とも人間ともつかない」鼻の欠けた怪物の姿で生きていくことになったのである。かつてのビスクラヴレットにとっては獣性は、内なる分身、もう一つの非日常の自分として、人間の姿をした日常の自分とははっきり分けられていたようだが、妻の獣性は彼女そのものであるとマリは示しているかのようだ。王の愛と賢明さが狼の姿に閉じ込められたビスクラヴレットのなかに人間性を目覚めさせ、ひいては彼の姿をも人間に戻してやるのとは対照的に、妻はビスクラヴレットを獣の姿に閉じ込めようとした。その行為自体が非人間的なものであり、自分を獣におとしめるものであった故に、彼女自身が外見も含めて獣性のなかに閉じ込められる結末となったのである。

5

狼男伝説をマリ・ド・フランスがどのように利用して自分の物語に取り込んだかを、いくつかの視点を定めて見てきた。元来、恐怖心を呼び起こす狼男という素材であるからこそ、そのなかに人間的なもの、特に愛の問題を注ぎ込んで、真の人間性、真の愛と獣性とをあざやかに

対照させている。マリは、『レー』のなかで他にもケルトの伝統によった超自然の物語を書いているが、彼女はそれを超自然そのものの驚異によって読者を引きつけるように仕立てるのではなく、驚異を象徴的に扱って、極めて人間的な問題、特に愛の問題、を説得力ある筆致で描くのを常としている。

注

- 1) 池上俊一『狼男伝説』(朝日新聞社、1992)、p.17。
- 2) Ovid, *Metamorphosis*, trans. Mary M. Innes (Harmondworth: Penguin Books, 1955), p.35.
- 3) Edward, Duke of York, *The Master of Game*, ed. W. and F. Baille-Grohman (London, 1904), p.33-34; quoted in Joyce E. Salisbury, *The Beast Within: Animals in the Middle Ages* (New York: Routledge, 1994), p.16.
- 4) ダニエル・ベルナル、『狼と人間——ヨーロッパ文明の深層』 高橋正男訳、(平凡社、1991)、p.48
- 5) クロード＝カトリーヌ・ラガッシュ、ジル・ラガッシュ、『狼と西洋文明』高橋正男訳、(八坂書房、1989)、p.47-48。
- 6) ラガッシュ、p.64.
- 7) マリ・ド・フランスの『レー』の原文はすべて次の書籍を参照した。なお、引用文はすべて「ビスクラヴレット」からとられている。Marie de France, *Lais*, ed. Alfred Ewert(Oxford: Basil Blackwell, 1944) また、訳文の引用は次の翻訳を使用させていただいた。『十二の恋の物語——マリー・ド・フランスのレー』月村辰雄訳(岩波書店、1988)
- 8) 池上、p.20。
- 9) 池上、p.22より、引用。

- 10) Philippe Ménard, *Les Lais de Marie de France* (Paris: Presses Universitaires de France, 1979), p.100.
- 11) Robert Hanning and Joan Ferrante's introduction to "Bisclavret" in their

translation of *The Lais of Marie de France* (New York: E.P.Dutton, 1978), p.104.

会員著書・訳書紹介

『七十年の友情—二十世紀を生きたドイツ女性二十人の証言』

H.ヤンゼン編、秋葉裕一、田ノ岡弘子、中村妥女(他)訳、(スリーエー ネットワーク)、1996、3,000円。

『クリスティーナの手紙』

W.ケュジンスカ編、小原雅俊訳、(恒文社)、1996、3,000円。

『チェーホフとチャイコフスキー』

E.バラバノヴィチ著、中本信幸訳、(新読書社)、1996、2,600円。

『統合ドイツの文化と社会』

原田 溥編、杉浦 實(他)著、(九州大学出版会)、1996。

『現代に生きるファウスト』

小西 悟著、(NHK出版)、1996、952円。

『ジェンダーと文学』

中込啓子著、(鳥影社)、1996、1,900円。

『漱石の20世紀』

深江 浩著、(翰林書房)、1996、2,400円。

『世界文学(2)』大阪外国語大学における世界文学の教育と研究』

市川 明、南田みどり、森高久美子(他)著、1996。

『パリに死す—評伝・椎名其二』

蜷川護著、(藤原書店)、1996、2,884円。

『グルーベチュ』

アンナ・ゼーガース著、河野富士夫・正子・貫橋宣夫・松本ヒロ子訳、(同学社)、1996。